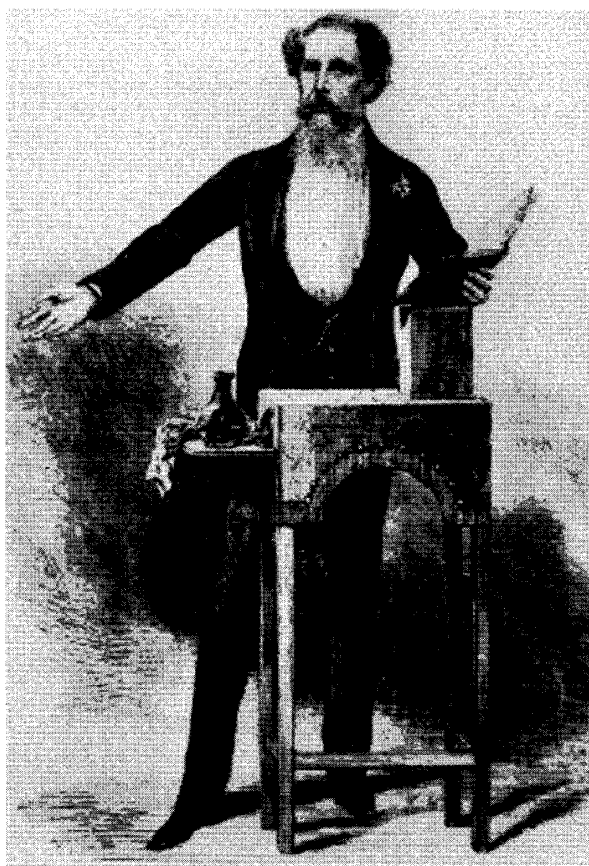


公開朗読版「クリスマス・キャロル」

チャールズ・ディケンズ 作
井原 慶一郎 訳



■第一節 マーレイの幽霊

いいですか、みなさん、マーレイは死んでいます。もし疑われるのであれば、教会の埋葬記録を調べてみてください。牧師が、書記が、葬儀屋が、喪主が、ちゃんと署名していますよ。スクルージの名前もあります。スクルージの名前は、ロンドンの王立取引所ではたいへん信用があって、彼が署名したものはすべて優良な債権とみなされるんですからね。

間違いなく、マーレイは死んでいます。

スクルージは、マーレイが死んでいることを知っていたかですって。あたりまえじゃないですか。どうして知らないということがあるでしょう。マーレイはスクルージの共同経営者だったんです。何年も一緒に仕事をしていたんですよ。スクルージはマーレイの、たった一人の遺言執行人、たった一人の遺産管理人、たった一人の遺産相続人、たった一人の残余財産受取人、たった一人の友達、たった一人の葬儀立会人だったのですから。

ただ、スクルージは、会社の表札のマーレイの名前をそのままにしていました。マーレイが死んで何年かたった今でも、事務所のドアのうえには「スクルージ&マーレイ商会」と書かれています。その会社は「スクルージ&マーレイ商会」という名前で知られていました。初めて事務所にやってきた人のなかには、スクルージのことをスクルージさんと呼ぶ人もいれば、マーレイさんと呼ぶ人もいました。スクルージはどちらの呼びかけにも答えていました。彼にとってはどっちでもよかったのです。

しかし、なんてけちな老人だろう、スクルージは！ 搾り取り、もぎ取り、つかみ取り、削り取り、いったんつかんだら絶対に離さない、強欲な、罪深い者！

路上で彼を呼びとめて、嬉しそうな顔をして、

「こんにちは、スクルージさん。今度家に遊びに来てくださいよ」という人はいないし、小銭を恵んでくださいと彼にいう物乞いもないし、今何時ですかと彼に聞く子供もいなければ、男性であれ、女性であれ、かつて生涯に一度として、どこそこへの道を教えてくださいとスクルージに尋ねた者は一人もない。盲導犬さえもが、スクルージのことを知っているようでした。スクルージがやって来るのを見ると、彼らは飼い主を玄関口や路地まで引っ張っていきました。そして、まるでこういつているかのようにしっぽを振ったのです。「あんなに邪悪な目を持つくらいなら、いっそ見えないほうがどんなにいいかわかりませんよ、ご主人さま！」

しかし、スクルージはそんなことはまったく気にしていませんでした。

さて、一年のうちで最も楽しい日——クリスマス・イブの日に、スクルージは事務所で忙しく働いていました。その日は、冷たく、寒々として、身を切るような、霧の濃い日でした。街中の時計の鐘が三時を打ったばかりだというのは、外はもうすっかり暗くなっていました。

スクルージは、事務員を見張るために、自分の部屋のドアを開けっ放しにしていたのですが、その事務員は、向こうの小さくて陰気な、水槽のような小部屋のなかで、せっせと手紙を書き写していました。スクルージの部屋の暖炉の火はとても小さかったのですが、事務員の部屋の暖炉の火はもっともっと小さく、石炭一個だけに見えます。けれども、事務員が暖炉に石炭をくべることはできませんでした。なぜなら、石炭入れは、スクルージの部屋に置いてあったからです。それに、もし事務員がシャベルを持ってスクルージの部屋に入っていけば、スクルージは、事務員の肩をたたいて退職を勧告したこ

とでしょう。だから仕方なく、事務員は白いマフラーを首に巻いて、ロウソクの炎で暖まろうとしましたが、想像力が足りなかったせいか、うまくいきませんでした。

「クリスマスおめでとう、おじさん！ 神さまの祝福がありますように！」元気の声が聞こえました。それはスクルージの甥の声でした。彼はとても素早くスクルージのところにやってきたので、スクルージは甥の声を聞いて初めて彼がそこにいることを知りました。

「ふん！ ばかばかしい！」

「クリスマスがばかばかしいですって、おじさん！ 本気でいってるんじゃないでしょうね」

「本気だよ。クリスマスなんてクソくらえだ！

クリスマスがお前にとっていったい何だっていうんだ。金がないのに勘定を支払う日、一年歳をとって一時間ぶんも金が増えていないのがわかる日、帳簿を決算して一年十二月すべての項目が赤字という答えがでる日じゃないか。もし、わしの望みどおりになるなら、メリー・クリスマスなんてほざいてまわる連中は、一人残らず自分のクリスマス・ブディングと一緒に蒸し焼きにして、心臓にヒイラギの枝を突き刺してから埋めてやる。当然だ！」

「おじさん！」

「甥っ子、お前はお前のやり方でクリスマスを祝えばよろしい。わしはわしのやり方でやる」

「やるって、そもそも祝ってないじゃないですか」

「じゃあ、わしはわしのやり方でやらない。クリスマスなんか祝ってなんになる！ クリスマスがお前に何をしてくれた！」

「お金にならなくても、ためになることはたくさんありますよ。なかでもクリスマスがそうです。僕はクリスマスがやってきたときにはいつでも、——イエスさまの誕生日として尊ぶのは

別にして、もちろんそれとこれとを区別することはできないけど——それを、ありがたい日だと思うんです。親切と、寛容と、慈善と、喜びの日。一年の長いカレンダーのなかで、この日だけは、みんなが心をつにして、普段閉じている心の殻を破って楽しく付き合うんです。そして、困っている人たちのことを、別の旅に向かう別の旅人ではなく、つかのまの人生とともに生きている同じ旅の仲間と考えるんです。だからね、おじさん、銀貨や金貨の一枚が僕のポケットに入るわけじゃないけど、クリスマスは僕のためになるし、これからもそうだと信じています。だから、クリスマス万歳！」

水槽のなかの事務員は思わず拍手しました。「それ以上音をたててみる」スクルージはいいました。「失業によってクリスマスを祝うことになるぞ。すいぶん演説がうまいじゃないか」今度は甥のほうに向き直っていいました。「政治家にでもなるんだな」

「怒らないでください、おじさん。ねえ、いいでしょう！ 明日僕たちと一緒に食事をしましょうよ」

お前たちの所に行くくらいなら——。そうです。彼は最後までいってしまいました。お前たちの所に行くくらいなら——地獄に行くほうがましだ、と。

「なぜです」スクルージの甥はいいました。「どうしてです」

「それなら、どうしてお前は結婚したんだ」

「恋に落ちちゃったからですよ」

「恋に・落ち・ちゃった・から・だと！」スクルージは、この世にたったひとつだけクリスマスよりもばかばかしいものがあるとすれば、それは、恋に・落ち・ちゃった・ことだといわんばかりに叫びました。「さようなら！」

「だけどね、おじさん、おじさんは僕が結婚する前から会いに来てくださらないじゃないですか。なぜ今それを理由にして来ないとおっしゃるんですか」

「さようなら」

「おじさんから何かをもらおうと思ってないし、何もお願いするつもりはありません。なのに、どうして友達になれないんですか」

「さようなら」

「そんなに頑固なおじさんを見て、心から残念に思います。僕が原因で、二人が口げんかしたことは今まで一度もないのに。だけど、今日僕はクリスマスに敬意を表して、おじさんと仲良くなろうとしたんです。だから僕は最後までクリスマス気分を持ち続けます。メリー・クリスマス、おじさん！」

「さ・よ・う・な・ら！」

「そして、新年おめでとう！」

「さ・よ・う・な・ら！」

それでも、スクルージの甥はひとつも愚痴をこぼさずに部屋を出ていきました。事務員は、スクルージの甥を見送ると、今度は別の二人の人物を招き入れました。彼らは、ほれほれするほどかっ幅がよい紳士で、今はもう帽子を脱いでスクルージの部屋のなかに立っています。手には帳簿と書類を持ち、スクルージに会釈しました。

「スクルージ&マーレイ商会さんですね」紳士の一人が、名簿を見ながらいきました。「お目にかかっているのは、スクルージさんでしょうか、それとも、マーレイさんでしょうか」

「マーレイは七年前に死んだよ。ちょうど七年前のこの日の晩にね」

「では、スクルージさん」その紳士は、ペンを手にとっていいました。「一年のうちで最もお

めでたいこの季節に、貧しい人たちが困っている人たちにちょっとした施しをするのは、いつにもまして好ましいことです。彼らはこの時期とくに困っております。何千人という人たちが、生活に必要な物資を買うことができません。また、何十万という人たちが、生活に楽しみを見出せないでいます」

「監獄というものはないのかね」

「監獄はじゅうぶんございます。しかし、わが国が、罪を犯していない大勢の者たちに、人間らしい心と体の糧を与えることができていないという現状では、私ども民間の有志が基金を集め、貧しい人たちに食べ物や飲み物、毛布や石炭などを買い与えるほかありません。私どもがこの時期を選びましたのは、とりわけこの時期、貧しい者が貧しさを痛感し、富める者が裕福を実感するからであります。あなたさまのお名前ですら記帳いたしましょうか」

「なしで頼む」

「匿名をご希望ですね」

「ほうっておかれるのがご希望だ。何がご希望かと聞かれたら、それがわしの答えだ。わしはクリスマスに陽気になんかならないし、怠けている連中を陽気にさせるような金もない。監獄と救貧院の運営を維持するために、ちゃんと高い税金を払っている。生活できないやつはそこに行けばよろしい」

「多くの者はそこに収容することができませんし、むしろ収容されるくらいなら死んだほうがましだと思うでしょう」

「死を選びたいのなら——止めはせん。過剰な人口が減って結構じゃないか」

ようやく事務所を閉める時刻がやってきました。スクルージは、椅子から降りると、水槽のなかの事務員に、その事実を黙って告げました。

事務員は、待ってましたとばかりに、すぐさまロウソクの火を消し、帽子をかぶりました。

「明日はまる一日休みが欲しいというんだらうな」

「よろしければ」

「よろしくはない。それにフェアじゃない。もし明日の分の半クラウンをわしが支払わないといったら、お前は、きっと、自分はひどい扱いを受けていると思うんだらう」

「……」

「それなのにお前は、仕事をしない日の賃金をわしが払うことに関しては、わしがひどい扱いを受けているとは思わんのだらう」

「一年に一度のことですから」

「毎年十二月二十五日に人さまのポケットから小銭をちよろまかす言い訳にはなっとらん！

しかし、明日どうしても一日休みが欲しいというんだな。それなら、明後日の朝はいつもよりずっと早く出て来るんだ、わかったな！」

事務員はわかりましたと答え、スクルージはぶつくさいいながら事務所をあとにしました。事務所は瞬く間に閉じられました。事務員は、白いマフラーの長い両端を腰の下までぶらさげながら、——というの、彼はオーバーコートを持っていなかったの——帰り道、クリスマス・イブを記念して、少年たちの列に混じって、二十回もすべり道をすべってから、家族みんなで目隠し遊びをしようと、全速力で家に帰りました。

スクルージはといえば、いつもの陰気な居酒屋で、いつもの陰気な夕食を食べました。彼はすべての新聞に目を通すと、残りは通帳を見て時間をつぶしました。家には寝に帰るだけだったのです。彼は、今は亡き共同経営者から譲り受けたアパートに住んでいました。それは、庭の奥まったところにある、押しつぶされたよう

な建物のなかの、陰気なひと続きの部屋でした。建物は今ではもうかなり古く、閑散としていました。というのも、そこに住んでいたのはスクルージただ一人だけで、残りの部屋はすべて事務所として貸し出されていたからです。

さて、みなさん、この家のノッカーには、それがとても大きかったということのほかには、とくに変わったところは何もありませんでした。また、スクルージはそこに住み始めてからというもの、朝も夜もこのノッカーを見ていました。さらに、スクルージは、ロンドンのシティ（商業・金融の中心地）の誰よりも空想する力というものを持ち合わせていませんでした。それなのです。スクルージが、ドアの鍵穴に鍵を差し込んだとき、彼がドアのノッカーのなかに見たもの、——彼の目にいきなり飛び込んできたものは——ノッカーではなく、マーレイの顔でした。

マーレイの顔。薄暗い地下の食料品貯蔵所のなかで鈍く光る腐りかけのロブスターのように、そのまわりに薄気味悪い光を帯びたマーレイの顔。それは、怒っている顔でも、荒れ狂っている顔でもなく、いつもマーレイがスクルージを見ていたように、スクルージの顔を見つめています。幽霊のようなおでこに、幽霊のような眼鏡をのせて。

スクルージがこの不思議な現象を見つめていると、それはもとのノッカーに戻りました。彼は、「くだらん！」と叫んでから、玄関のドアをバタンと閉めました。

その音は、雷のように家中に鳴り響きました。階上のすべての部屋と、地下のワイン貯蔵所のすべての樽が、それぞれ別々の反響音を響かせたように聞こえました。しかし、スクルージは、反響音ごとにおびえるような、やわな男では

ありません。ですから、彼はドアの鍵を開めると、玄関ホールを横切って、ロウソクの芯を切りそろえながら、ゆっくりと階段を上っていきました。

スクルージは、階段を上りながら、あたりの暗闇をこれっぽっちも気にしていませんでした。暗闇はお金がかからないからいいのです。それでも、スクルージは、自分の部屋の入り口の重たいドアを閉める前に、いくつかある部屋のなかを確認してまわりました。そうしないですむほどには、まだ例の顔が頭から離れていなかったのです。

居間、寝室、納戸、すべてよし。テーブルの下にも、ソファの下にも、誰もいない。暖炉には小さな火が消えずに残っている。スプーンとお椀もちゃんとそこにある。小さな鍋に入ったお粥も、——スクルージは鼻かぜをひいていたのです——ちゃんと暖炉の棚のうえにある。ベッドの下には、誰もいない。クローゼットのなかにも、誰もいない。怪しげな様子で壁にかかっていたガウンのなかにも、誰もいない。

彼は満足して、入り口のドアを閉め、錠をおろしました。二重に錠をおろしました。いつもはしないことです。こうして不意打ちを食らわないように安全を確保してから、彼はネクタイをはずし、ガウンとスリッパに着がえ、防寒用のナイトキャップを被りました。そして、暖炉の小さな火にあたりながら、お粥を食べ始めました。

椅子の背もたれに寄りかかったとき、ふと彼の目にとまったのは、ひとつのベルでした。今は使われていない、天上からぶら下がっているそのベルは、どういう理由かはわかりませんが、この建物の最上階にある部屋の呼鈴とつながっていました。彼が見つめていると、このベルは

静かに揺れ始めました。その時スクルージが感じた驚きと、いよいよのない恐ろしさはどれほどだったでしょう。すぐにこのベルは激しく鳴り始めました。そして、家中のベルが激しく鳴り始めたのです。

その音に続いて、地下のほうから、何かの金属音が聞こえてきました。それは、まるで誰かがワイン貯蔵所の樽にかけた重い鎖を引きずっているような音でした。

その音は次第に大きくなり、一階まで上ってきました。そして、その音は階段を上り、まっすぐにスクルージの部屋のドアのところまでやってきました。

その音が重たいドアを通り抜け部屋に入ってきたとき、スクルージの目の前に現れたのは幽霊(!)でした。その時、消えかけていたロウソクの炎が、まるでこう叫んでいるかのように激しく燃え上がったのです。「俺はやつを知っているぞ! マーレイの亡霊だ!」



同じ顔。まったく変わっていません。髪を後ろでくくり、いつものチョッキを着て、ぴったりとしたズボンにブーツを履いたマーレイです。彼の体は透明で、スクルージが彼の姿を眺めると、チョッキの向こう側には、上着の背後に付いている二つのボタンが透けて見えました。

スクルージは、マーレイにはハートがないと人がいうのをよく耳にしていたましたが、今の今までそんなことはまったく信じていなかったのです。

いいえ、今だって信じていません。その幽霊をじっと見つめ、それが彼の目の前に立っているのを見ていたにもかかわらず、その幽霊の放つ視線の冷たさに背筋が凍っていたにもかかわらず、その幽霊の頭とあごを縛ったハンカチの織り目までもが見えていたにもかかわらず、彼はまだその存在を疑っていたのです。

「どういうことだ!」スクルージは、いつもの調子で辛辣に冷たくいいました。「何が望みだ!」
「たくさんだ!」マーレイの声です。間違いありません。

「お前は誰だ」

「私が誰だったかと聞くのか」

「それなら、お前は誰だったんだ」

「生前はお前の共同経営者だったジェイコブ・マーレイだ」

「すわれるのか」

「座れる」

「じゃあ、座ってみろ」

スクルージがそんな質問をしたのは、こんなに透明な幽霊が椅子に座るといふ芸当をはたしてやってのけることができるかどうか、不審に思ったからです。しかし、幽霊は、いつもの慣れているというように、暖炉をはさんで向かい側の椅子に腰を下ろしました。

「私の存在を信じていないらしいな」

「信じない」

「お前の五感を信じないで、いったい何をもつて私の存在を信じるというのかね」

「わからん」

「どうして自分の感覚を信じないんだ」

「ちょっとしたことで狂うからだ。少し胃の調子が悪いとだまされるからだ。お前さんは、消化されていない牛肉か、マスタードのしみか、チーズのかけらか、生煮えのポテトだ。お前さんは、何かは知らんが、霊魂というよりも、ベニコシのほうに近いだろう！」

スクルージは、冗談をいうような男ではなかったし、その時だって、決しておどけていたわけではないのです。自分自身の気を紛らし、恐怖心を抑えるために、しゃれのめそうとしていたというのが本当のところでは。

しかし、彼の恐怖はどれほどだったでしょう。幽霊が、部屋のなかは暑すぎるとでもいうように、頭に巻いたハンカチを取ると、その下あごが胸のところまで落ちてきたのです！

「勘弁してくれ！ 恐ろしい亡霊よ、どうしてわしを苦しめるんだ。なぜ幽霊がこの世に現れ、わしのところにやって来るんだ」

「すべての者の心が、人々と交わり、あまねく旅をするように創られているものだ。もし、この世で心が一步も外に出なければ、人はあの世でそうする運命にあるのだ。私は語りたことをすべて語ることができない。私に残された時間はわずかだ。私は休むことも止まることもできない。一か所に留まることができないのだ。私の心は一步も事務所から出なかった。私のいうことを聞け！ 私の心は生涯にわたって会計事務所の薄暗い穴蔵からさまよい出ることはなかった。だから今、永遠にさまよっているのだ！」

「死んでから七年。その間ずっと旅を続けているのか。ゆっくりなんだろう？」

「飛ぶように速くだ」

「どれだけ遠くまで行けば気がすむんだ」

「ああ！ 無知蒙昧の輩よ、人類の長きにわたる永遠の平和への絶え間ない営み、——というのも、それが訪れる前に、人々はあの世へと旅立たねばならないので——その営みに気づかないとは。愛にあふれた者が、どんなに小さな場所でも、自分の愛情をすべて使い尽くすには、人生はあまりにも短いと感じている、そのことに気づかないとは。たった一度だけ与えられた、生きた愛の時間を逃してしまったことへの後悔の念は、無限で果てがない、そのことに気づかないとは！ だが、私がそうだったのだ！ 私こそがその輩だったのだ！」

「でも、ジェイコブ、あんたは仕事のできる優秀な実業家だったじゃないか」スクルージは口ごもりながらいいました。彼はマーレイのことを自分に当てはめて考えるようになっていたのです。

「仕事だと！ 人類が私の仕事だったのだ。まわりにいる人たちの幸福が私の仕事だったのだ。思いやりが、寛大さが、善意が、すべて私の仕事だったのだ。私の仕事という大海に比べれば、商売上の取引などは、わずか一滴のしづくにすぎなかったのだ！」

幽霊は、それが尽きせぬ悲しみの源だというように、両腕を広げて鎖を持ち上ると、その重い鎖を再び床に投げ出しました。

「一年のうちでこの時期が最もつらい。なぜ私は人々の間をうつむいて歩き、かつて東の国の三博士たちを神聖な馬屋へと導いた、あの祝福された星を見上げなかったのか。その星の光が私を導いてゆく貧しい家々はなかったのだろうか

か」

スクルージは、幽霊がこんな調子で喋り続けるのを聞いてうろたえ、がたがたと震え始めました。

「私のいうことを聞け！ 残された時間は少ないのだ」

「聞くとも。だが、私につらく当たらないでくれ。もう少し普通の言葉でいってくれ、ジェイコブ！ お願いだ！」

「今夜私がここに来たのは、私がたどった運命をお前が避ける可能性と望みをまだ持っているということを知らせるためだ。その可能性と望みは私が得たものなのだ、エベニーザー」

「さすがはわしの友達。ありがたい！」

「お前はこれから三人の精霊の訪問をうけることになる」

「それが、さっきあんたがいった可能性と望みなのか、ジェイコブ。それなら、遠慮させてもらおうかな」

「彼らの訪問なしで、私が歩んだ道を避けることはできない。最初の訪問者は明日の夜、一時の鐘が鳴ったときに。二番目の訪問者はその次の夜、同じ時刻に。三番目の訪問者はそのまた次の夜、十二時の最後の鐘の音が鳴り終わったときに。二度と私に会うことはない。それから、お前のためにいうが、私たちの間で交わされた言葉を忘れるな！」

幽霊は、後ずさりをして、スクルージから離れていきました。幽霊が一步下がるにつれ、後ろの窓は少しずつ開き、幽霊が窓のところまで来ると、窓は完全に開いていました。そして、幽霊は、そのひとりで開いた窓から、寒々とした夜の闇のなかに出ていったのです。

スクルージは窓を閉めると、幽霊が入ってきた入り口のドアを調べました。ドアは、彼が自

分の手でそうしたように、二重に錠が下ろされていて、誰かが錠を動かした形跡は見あたりませんでした。スクルージは、「ばかばかしい！」といおうとしましたが、最初のほうだけいってやめました。そして、スクルージは、精神的な疲労からか、その日の疲れからか、普段は見えない世界を見たせい、幽霊との陰鬱な会話のせい、時間が遅かったからか、とにかく休みを必要としていました。彼はまっすぐにベッドに行くと、ガウンを着たまま、その場で眠り込んでしまいました。

■第二節 第一のクリスマスの精霊

スクルージが目を覚ますと、あたりはとても暗く、ベッドから部屋のなかを見ると、透明な窓と透明ではない壁の区別がつかないほどでした。すると、突然、教会の時計が、低く、鈍く、うつろで、物憂い、一時の鐘を打ちました。と同時に、まぶしい光が部屋のなかに現れ、ベッドのまわりのカーテンが開けられました。

そのカーテンは、奇妙な人物によって開けられました。子供のようでもあり、また、老人のようでもあります。不可思議なもやのようなものを通して見ているせいで、その人物は視界から遠ざかって、子供のような大きさにまで縮まって見えているのです。首から背中へと伸びた髪は、老齢のためか、真っ白でした。しかし、顔にはしわが一本もなく、肌には若々しいばら色の輝きがありました。手には新緑のヒイラギの枝を持っていましたが、その冬の象徴と不思議な対照をなすように、ドレスは夏の花で飾られていました。しかし、最も奇妙だったのは、頭の頂から明るく透明な光があふれ出ていたことで、その光によって体全体が照らし出されてい

たのです。その人物は、あまり活動しないときには、今は脇に抱えている大きなロウソク消しを帽子のようにして頭に被るに違いありません。「あなたが、わしのところに来ると予告されていた精霊さまですか」

「そうだよ！」

「お名前はなんとおっしゃいますか」

「過去のクリスマスの精霊だよ」

「遠い昔の過去ですか」

「ちがうよ。君の過去だよ。これから僕と一緒に見るのは、過去に起こったことそのままの影だよ。彼らには僕たちが見えないからね。さあ、立ち上がって！ 一緒に行くよ！」

天候も悪いし、時間も遅いし、外を出歩くのに適しているとは思えません、ベッドのなかは暖かくていい気持ちですが、温度計を見ると氷点下を大きく下回っています、それに、わしはスリッパとガウンとナイトキャップという出で立ちなんですからね、おまけに風邪をひいていて体調もよくありません、とスクルージが抗弁しても無駄だったでしょう。女性の手のようにやさしくつかまれているだけでしたが、抵抗することはできなかったのです。彼は立ち上がりました。しかし、精霊が窓のほうに行くのを見て、彼は精霊の衣服を握りしめ、やめてくださいと懇願しました。

「わしは人間だ、落ちちゃう！」

「僕の手がそこに触れていれば」精霊は自分の手をスクルージの胸のうえに置いていました。「これから先は落ちないよ！」

精霊がそういうと同時に、彼らは壁を通り抜け、次の瞬間には、ロンドンのにぎやかな大通りの真ん中に立っていました。お店のウィンドウの飾りから、ここでも、今がクリスマスの季節であるということはすぐにわかりました。

精霊は、ある商店のドアの前で立ち止まると、この場所を知ってるかいと尋ねました。

「知るも知らないも、わしはここで徒弟として働いてたんだ！」

彼らはなかに入りました。毛糸の帽子を被った老紳士——とても背の高い机を前にして座っていたので、もう五センチ高ければ、頭を天上にぶつけてしまうのではないかと思われるほどでしたが、——この老紳士を見てスクルージは嬉しくなって叫びました。

「これはこれは、フェジウィッグ爺さんじゃないか。ありがたい。フェジウィッグが生き返ったぞ！」

フェジウィッグ爺さんは、ペンを置くと、時計を見ました。時計の針は七時を指していました。彼は嬉しそうに両手を擦り合わせ、大きなチョッキを定位置に戻すと、足の先から頭のとっぺんまで全身で笑いながら、心地よく、滑らかで、曇りのない、太い、陽気な声で叫びました。

「おーい、君たち！ エベニーザー！ デイック！」

生きて動いている昔の自分の姿——若い頃のスクルージが、徒弟仲間に伴われて、やってきました。

「おや、あれは、デイック・ウィルキンズですよ！」スクルージは精霊に向かっていいました。「一緒に年季奉公をした仲間だ。なつかしいなあ。わしによくなついてくれていたよなあ、デイックは！ 今は亡き、かわいそうなデイック」

「さあさあ、息子たちよ！」フェジウィッグはいいました。「今夜はもう仕事はなしだ。クリスマス・イブだよ、デイック。クリスマスだよ、エベニーザー！ いち、に、さん、でシャッターを閉めよう。片付けるんだよ、お前たち、そして、広々とした空間を作り出すんだ！」

片付けろ、片付けろ！フェジウィッグ爺さんの指図があれば、何であれ片付けようという気になるし、何でも片付けられてしまいます。あつという間でした。動かせる家具はすべて、永久にこの世から姿を消したとでもいうように見えなくなりました。床を掃き、水を撒き、ランプの芯を切りそろえ、暖炉には石炭がくべられました。すると、どうでしょう。そのお店は、あなたが冬の夜に見たいと思うような、居心地がよく、暖かく、清潔で、明るい、見事な舞踏室になったのです。

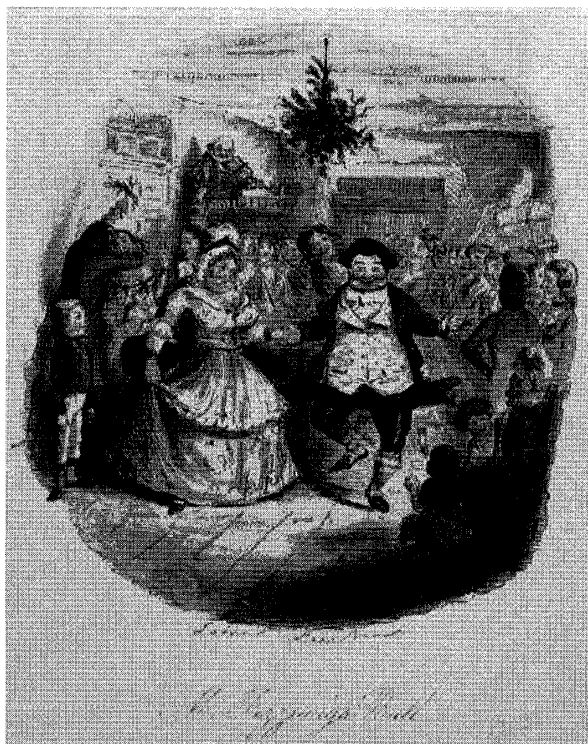
楽譜を持ったヴァイオリン弾きがやってきました。さきほどの背の高い机に登ると、そこをオーケストラ席にして、五十人の腹痛のうめき声よろしく調律を始めました。フェジウィッグ夫人がやってきました。体全体が一つの大きな笑顔のようです。三人のフェジウィッグのお嬢さんがやってきました。美しく輝いています。そのあとから、六人の求愛者たちがやってきました。身を焦がし、夜も眠れません。その店で働く、すべての若い男女がやってきました。女中が、いとこだといって、パン屋をつれてきました。まかないの女性が、兄の親友だといって、牛乳屋をつれてきました。みんなが次々にやってきました。あるものは恥ずかしそうに、あるものは堂々と、あるものはしとやかに、あるものはぎこちなく、あるものは押したり、あるものは引っぱりたり、みんなが、どうにかこうにかしてやってきました。さあ、踊りが始まりました。みんなで二十組のカップルになって踊ります。相手を半分回してから、戻ります。中央に進み出て、また戻ります。いろいろな人と素敵なグループを作ってくるくと回ります。先頭のカップルはいつでも間違っただ道を通って後ろのほうに進みます。次に先頭になったカップ

ルは位置につくと、すぐさま踊り始めます。そうこうしているうちに、先頭のカップルの役回りが一巡して、最初に戻ってきました。これを見ると、フェジウィッグ爺さんは、手をたたいて踊りをやめるようにいい、「よくやった！」と叫びました。すると、ヴァイオリン弾きは、彼のために特別に用意された黒ビールのジョッキのなかに、ほてった顔を突っ込みました。

それから、さらに踊りがあり、罰金遊びがあり、また踊りがあり、今度はケーキを食べ、ぶどう酒のポンチを飲み、ロースト・ビーフを食べ、煮豚を食べ、ミンス・パイをいただいてから、ビールも飲みました。しかし、なんといても、その夜の最大の見ものは、ロースト・ビーフと煮豚を食べたあとで、ヴァイオリン弾きが「サー・ロジャー・ド・カヴァリー」を演奏し始めてからでした。フェジウィッグ爺さんは、フェジウィッグ夫人と踊るために前に進み出ました。リード役の先頭のカップルです。この踊りは、彼らにはうってつけの難しい踊りです。二十三組か四組のカップルがあとに続きます。彼らも侮れない人たちです。絶対に踊る人たちです。歩くななんて考えたこともありません。

けれども、彼らが倍の数、いやいや、四倍の数になっても、フェジウィッグ爺さんにはかないません。それから、フェジウィッグ夫人にも。彼女は、まさにフェジウィッグ爺さんのパートナーにはうってつけの人物です。フェジウィッグの両ふくらはぎからは、実際に光が出ているように見えました。ダンスの間じゅう、ぴかぴか光るのです。フェジウィッグの両足が次の瞬間にどうなるかなんて、わかりっこありません。フェジウィッグ爺さんとフェジウィッグ夫人が前に進み出て、また戻ります。相手をくると回し、お辞儀をします。列を縫って後ろのほう

に進みます。両手でアーチを作ったり、そのアーチをくぐったりして、もとの場所に戻ります。こうした一連の踊りが終わったとき、フェジウィッグは、空中で両足を見事に交差させました。あまりにも見事だったので、両足でウインクをしたように見えたほどです。



時計が十一時を打つと、この家庭的な舞踏会はお開きになりました。フェジウィッグ夫妻は出口の両脇に立ち、一人ひとりと握手して見送りながら、クリスマスおめでとう、といいました。最後に二人の徒弟が残ると、彼らにも同じようにしました。こうして、陽気な笑い声が次第に消えていくと、二人の若者は、裏店のカウンターの下にある自分たちの寝所に入りました。「単純な人たちを感謝で一杯にするのは、たわいもないことだね」精霊がいきました。「彼はこの世のお金を一、二ポンド使っただけだよ。三、四ポンド、かな。それが、あれほどの賞賛に値するかしら」

「そうじゃないですよ」スクルージは、熱く

なって、知らないうちに若い頃の自分に戻っていいました。「そうじゃないんです、精霊さん。彼はわしらを幸せにも不幸せにもする力を持っているんですよ。わしらの仕事を楽しみにも苦痛にも、喜びにも苦しみにも変えられる力を持っているんです。彼のそういった力が、言葉や表情といった、ほんの些細なことのなかにあって、目に見える形で足したり計算したりすることができないとしても、それが何だっていうんです。彼が与えてくれる幸福は、お金では買えない価値を持っているんですから」

彼は精霊の視線を感じて、話すのをやめました。

「どうしたの」

「いいえ、別に……」

「何かある、でしょ」

「いいえ、ただ、ちょっと、その、うちの事務員にひと言ふた言いつてやりたくて。ただそれだけです」

「僕の時間も少なくなってきたよ」精霊がいきました。「急げ！」

精霊は、スクルージやほかの誰かに向かってそういったものではありませんでしたが、その言葉の効果はすぐに現れました。というのも、スクルージは再び過去の自分自身を目にしていたのです。彼は、年齢を重ね、三十歳くらいになっていました。

彼は一人ではありませんでした。喪服を着た若い美しい女性のそばに座っています。彼女の目には涙が溜まっていた。

「たいした問題ではないのでしょうか」彼女は、穏やかに、若いスクルージに向かっていいました。「あなたにとっては。別の偶像が私に取って代ったんですもの。もし、それが、これから先、私がそうしたいと思っていたように、あな

たに喜びを与えるのなら、私が悲しむべき理由はありません」

「何の偶像が君に取って代ったって？」

「黄金の偶像よ。私は、あなたの高い志が少しずつ崩れていって、あなたがお金儲けの虜になってしまったのを、これまで見てきたのではなかったかしら」

「だから何なんだ。僕がそれだけ大人になったのだとしても、それが何だっていうんだ。君に対しては変わっちゃいないよ。僕が婚約を解消しようといったことが今までにあるかい」

「言葉では、ないわ。一度も」

「じゃあ、何だったらあるんだ」

「性格が変わってしまったこと、心が変化してしまったことよ。別の人生を歩み始めてしまったこと、違う望みを求め始めてしまったことよ。もしあなたが、昨日、今日、明日、自由になったとしたら、持参金もない女性を選ぶなんて、私が信じられると思う？ もし、そんな女性を選んだとしても、そのあとであなたの後悔が続くことを、私が知らないと思うの？ 知っているわ。だから、あなたを自由にさせてあげる。あなたのために。あなたを愛していたから」

「精霊さま！ ここから連れ出してくれ」

「僕はいったはずだよ。僕と一緒に見るのは、過去に起こったことそのままの影だって。これは君がやったことで、僕のせいじゃないからね！」

「連れ出してください！」スクルージは叫んだ。「堪えられない！ 一人にしてくれ！ 戻してくれ。もう出てこないでくれ！」

精霊としばらく揉みあったあと、スクルージは自分がひどく疲れていて、抵抗できない眠気に襲われていることに気づきました。さらに、自分が寝室にいるのに気づくと、よろめきながらベッドのほうに向かいました。そして、そこに

たどり着くか着かないかのうちに、彼は深い眠りへと落ちていったのです。

■第三節 第二のクリスマスの精霊

スクルージは自分の寝室で目を覚ましました。間違いありません。しかし、その寝室と隣りの居間は、——彼はスリッパを履き、足を引きずりながら、明るい光に吸い寄せられるように、その居間に向かいました——驚くほど様子が変わっていました。壁と天上はつややかな緑で覆われ、小さな森となっていました。ヒイラギとヤドリギとツタの葉は、まるであちこちに置かれた鏡のように、光を照り返していました。スクルージの時にも、マーレイの時にも、それ以前にもずっと、石のように冷えきっていた暖炉がこれまでに経験したことがないような大きな炎が、轟々と煙突に向かって燃え上がっていました。まるで王座を形づくるように、床のう上に積み上げられていたのは、七面鳥、ガチョウ、野ウサギの肉、塩漬けの豚肉、大きな牛肉の塊、子豚、長いソーセージの輪、ミンス・パイ、クリスマス・プディング、樽に入った牡蠣、真赤に焼けた栗、サクランボ色の頬をしたリンゴ、果汁たっぷりのオレンジ、甘い香りのナシ、巨大な十二夜ケーキ、大きなボウルに入ったポンチ酒でした。この椅子のう上に腰かけていたのは、見るも輝かしい一人の巨人でした。彼は、^{ほうじょう}豊饒の山羊の角の形をした、光り輝くたいまつを手を持っていました。彼がこのたいまつを高く掲げると、その光が、ドアのところを恐る恐る覗き込んでいたスクルージのう上に降りそそぎました。



「入るんだ！ 入っておいで！ 私のことをもっとよく知るのだ。私は現在のクリスマスの精霊だ。よく見るがよい！ 私のようなものに以前出会ったことはなかったかね！」

「いいえ」

「私の若いほうの家族のものたちと出歩いたことは一度もなかったかね」精霊は続けていきました。「つまり、ここ数年間か数十年間に生まれた私の兄たち——というのも私が一番若いのだ——と一緒にということだが」

「なかった、と思います。ご兄弟が多いのですか、精霊さま」

「千八百人は優に越える」

「そんな大家族では毎月の食費が大変でしょう！

ねえ、精霊さま、わしをどこにでも連れて行ってください。昨夜はいいや出かけましたが、大切な教えを学びました。その教えは今でも心

のなかに生きています。今夜も、もし教えてくださることがあれば、学ばせていただきます」

「私の衣服に触れなさい」

スクルージはいわれた通りにし、精霊の衣服をしっかりと握りしめました。

すると、部屋と、そのなかにあったものはすべて一瞬のうちに姿を消し、彼らは、雪の降ったクリスマスの朝の街路のうえに立っていました。

スクルージと精霊は、誰からも姿を見られることなく、まっすぐにスクルージの事務員の家に向かいました。精霊は、玄関の戸口のところでこやかに笑うと、立ち止まり、手に持っていたたいまつを振りまいて、ボブ・クラチットの家を祝福しました。考えてもみてください！

ボブは一週間に十五シリングしかもらってないんですよ。土曜日に彼が手にするのはたったの十五シリングなんです。それでも、現在のクリスマスの精霊は、この四部屋しかない小さなボブの家を祝福したのです！

まず、クラチット夫人、クラチットの奥さんの姿が見えました。二回も裏返して作り直したガウンを着ていましたが、リボンでおめかしをしていました。安物ですが、六ペンスにしてはいい見栄えです。テーブル・クロスをかけるのを手伝っているのが、次女のベリンダ・クラチット。彼女もまたリボンでおめかしをしていました。鍋のなかのジャガイモにフォークを突き刺しているのが、長男のピーター・クラチット。大きなシャツのえりを口に入れて、立派な服装をしているのを喜んでいます。このシャツは父親の数少ない私有財産のうちの一つでしたが、クリスマスを記念して、息子であり相続人であるピーターに贈与されたのです。彼は、このリネンのシャツを着て、さっそく社交界の人々が

集まる公園に出かけてみたいものだと考えていました。それから、男の子と女の子、二人のちっちなクラチットが、パン屋の外でガチョウが焼ける匂いがしたよ、あれは絶対うちのガチョウだよ、と叫びながら、ものすごい勢いで入ってきました。ガチョウに入れるセージと玉ねぎの詰め物のことを考えるという贅沢を味わいながら、二人のちっちなクラチットはテーブルのまわりで踊り、ピーター・クラチットのお兄ちゃんを褒めたてました。クラチットのお兄ちゃんは、鼻を高くすることもなく、シャツのえりで窒息しそうになりながら、火起こしに奮闘していましたが、ようやく、なかなか煮えないジャガイモが浮き上がってきて、早くここから出して皮を剥いてくれとでもいうように、鍋の蓋をノックしているのが聞こえてきました。

「あなたたちの大切なお父さんはどうしたんだろうね」クラチット夫人がいました。「そしてティム坊やはどうしたのかしら！ それにマーサだって、去年のクリスマスには、もう三十分も前には帰っていたはずよ！」

「マーサが帰ってきました、お母さん！」少女がこういって、入ってきました。

「マーサが帰ってきたよ、お母さん！」二人のちっちなクラチットが叫びました。「万歳！」

ガチョウのね、とってもね、いい匂いがしたよ、マーサ！」

「まあ、かわいそうに、どうしてこんなに遅かったの」クラチット夫人は、何度も娘にキスをして、ショールや帽子を脱がせてやりながら、いました。

「昨夜までに仕上げなくてはならない仕事がたくさんあったの」娘は答えました。「それに、今朝は大掃除をしなくちゃならなかったのよ、お母さん！」

「あら、そう！ まあ、でも、帰ってきたんだからよしとしましょう」クラチット夫人はいいました。「暖炉の前に座って、体を温めて。まあ、こんなに冷えちゃって！」

「だめ、だめ！ お父さんが帰ってきたよ」いつでもどこにでも現れる、二人のちっちなクラチットがいました。「かくれんぼ、マーサ、かくれんぼ！」

マーサがかくれると、小柄な父親のボブが入ってきました。ふさ飾りをのぞいても一メートルはありそうなマフラーを首から下げています。すりきれた服は、クリスマスの季節にふさわしいように、糸で繕い、きれいにブラシがかけられました。ボブの肩に乗っかっているのが、ティム坊やです。かわいそうなティム坊や！ 手には松葉杖を持ち、足は鉄の棒で支えられています。

「あれ、マーサはどうしたの」ボブ・クラチットがあたりを見まわしながらいいました。

「帰ってこないわよ」クラチット夫人がいました。

「帰ってこないだって！」意気揚々としていたボブが急にぺしゃんこになっていいました。というのも、彼は教会からの帰り道ずっとティムのサラブレッドになっていて、ヒヒーンと後ろ立ちになって家に到着したところだったのです。「クリスマスの日に帰ってこないだって！」

マーサは、たとえ冗談にしても父親ががっかりしている顔を見たくなかったので、我慢しきれずにクローゼットのドアの背後から姿を現し、父親の腕のなかに飛び込みました。いっぼう、二人のちっちなクラチットは、ティム坊やをせきたてて、彼を洗濯場に連れて行きました。普段は洗濯に使う銅釜のなかで、プディングが歌っているのを聞かせるためです。

「ティムは教会でいい子にしていましたか」ボブの信じやすさをからかい、彼が心ゆくまで娘を抱きしめるのを見届けると、クラチット夫人がいました。

「いい子にしてたよ」ボブがいました。「いや、それ以上だった。一人でずっと座っていたせいかな、どういうわけか考え深くなっちゃって、奇妙なことを考えたんだね。家に帰る途中でこういうんだ。僕は教会に来ている人たちが僕のことを見てくれたらいいなと思う。だって、イエスさまが歩けない物乞いを歩けるように、目の見えない人を見えるようにしたことをクリスマスの日思い出すのはいいことだからね、だって」

みんなにこういったとき、ボブの声は震えていましたが、ティム坊やはどんどん元気になってきているから心配ないよ、といったときにはもっと震えていました。

コツコツと小さな松葉杖を動かす音が聞こえ、ティム坊やが戻ってきたので、もうそれ以上何もいいませんでした。ティム坊やはちっちゃな弟と妹に支えられて、暖炉のそばの椅子に腰掛けました。いっぼう、ボブは、——かわいそうに、これ以上みすぼらしくすることができるのでしょうか——ぼろぼろになったシャツのそでをまくり上げて、暖かい飲み物を作りました。水差しのなかでジンとレモンを調合し、それを何度もかき混ぜてから、暖炉の棚のうえに置いて沸騰させます。ピーターのお兄ちゃんと、どこにでも姿を現す二人のちっちゃなクラチットは、パン屋のかまどで焼いてもらったガチョウを取りに行きましたが、すぐにガチョウを先頭に行進しながら帰ってきました。

クラチット夫人は、小さな鍋に前もって用意していたグレービー・ソースを煮立たせます。

ピーターのお兄ちゃんは、勢いよくジャガイモをつぶします。ベリンダ嬢は、アップル・ソースに甘味をつけます。マーサは暖めたお皿を拭きます。ボブは自分の隣りの小さな隅っこの席にティム坊やを座させます。二人のちっちゃなクラチットは、自分たちのも忘れずに、みんなの椅子を用意します。二人は見張りのように自分たちの持ち場につくと、スプーンを口のなかに押し込みました。よそう順番がくる前にガチョウを見て、キヤーと大きな声をあげてしまうとお行儀が悪いからです。ついに、料理とお皿が並べられ、食前のお祈りが唱えられました。みんなが息を飲んで見守ると、クラチット夫人がゆっくりと切り盛り用のナイフを眺めました。いよいよガチョウの胸にナイフが入る瞬間です。ナイフが入る、と同時に、待ちに待っていた詰め物がどつとあふれ出して、みんなは一斉にワーッと喜びの声をあげました。ティム坊やでさえ、二人のちっちゃなクラチットの真似をして、ナイフの柄でテーブルをたたいてから、「万歳！」とか細い声で叫んだほどです。

こんなに美味しいガチョウはたべたことはありません。いまだかつてこれ以上のガチョウが料理されたことはないと思う、とボブがいました。この柔らかさといい、風味といい、大きさといい、値段といい、世界中の賞賛の的です。このガチョウにアップル・ソースとマッシュポテトを加えると、家族全員にとってじゅうぶんな食事となりました。確かに、クラチット夫人がお皿のうえに残ったひとかけらの骨を見ていったように、結局全部は食べきれなかったのです！

それでもみんながじゅうぶんいただきました。とくに、ちっちゃなクラチットたちは、セージと玉ねぎの詰め物に眉まで浸かって大満足でした！ さてここで、ベリンダ嬢が新しくお皿を

取り替えると、クラチット夫人は、一人で部屋を出て行きました。銅釜からプディングを取り出して持って来るためです。不安だったので、誰にもついてきて欲しくなかったのです。

生煮えだったらどうしよう！ 袋から出すときに壊れちゃったらどうしよう！ みんながガチョウに夢中になっていた間に、泥棒が裏庭の柵を越えて入ってきて、プディングを盗んじゃってたらどうしよう！ この最後の事態を想定して、二人のちっちゃなクラチットは顔が真青になりました！ ありとあらゆる恐ろしい想像が頭のなかを駆けめぐったのです。

わあい！ すごい湯気だ！ プディングが銅釜から取り出されたぞ。洗濯日のような匂いがする！ これは布の匂い。食べ物屋さんとお菓子屋さんが隣同士で、そのまた隣りが洗濯屋さんみたいな匂い！ これがプディングなんだ！

三十秒ほどしてクラチット夫人が戻ってきました。頬を紅潮させ、誇らしく微笑んでいます。両手に持ったプディングは、干ぶどうの斑点のついた丸い砲弾のよう。硬くてしっかりしています。プディングにふりかけたブランデーに点火して青い炎がとてもきれい。てっぺんにはヒイラギの枝が飾ってあります。

ああ、なんて美味しいプディングなんだろう！

ボブ・クラチットは、穏やかな口調で、このプディングはクラチット夫人が結婚して以来作ってきた歴代のプディングのなかでも最高の出来だと思う、といいました。クラチット夫人は、やっと心の重荷がとれたので正直にいうけど、実は小麦粉の量がちょっと心配だったのよ、といいました。誰もがそのプディングの素晴らしさについて賞賛しましたが、誰もそのプディングが大家族にとっては小さすぎるということはいいませんでした。どのクラチットもそんなこ

とをほんのちょっとでも口にするだけで、恥ずかしさで真赤になったことでしょう。

夕食が終わると、テーブルのうえを片付け、暖炉のまわりを掃き、石炭をくべて火の勢いを強くしました。水差しに入った飲みものを味見すると完璧な出来上がり。テーブルにはリンゴとオレンジのデザートが置かれ、栗の実をのせたシャベルが暖炉の火のうえにかけられました。そして、クラチットの家族全員が、ボブ・クラチットがいうところの円になって、暖炉のまわりに集まりました。ボブの手もとにはこの家のグラスがすべて並べられています。といっても、大きなコップが二つと取っ手のない耐熱カップが一つだけでした。

それでも、これらのコップは、黄金の杯とまったく同じように水差しから注いだ暖かい飲み物をたたえました。ボブが笑顔でみんなに飲み物を配ると、火にかけた栗が激しくパチパチと音をたてました。それから、ボブが乾杯の音頭をとっていいました。

「クリスマスおめでとう。神さまの祝福がありますように！」

みんながこの言葉を繰り返しました。

「僕たち一人ひとりに神さまの祝福がありますように！」みんなに少し遅れてティムがいました。

ティムは父親にぴったりくっつくようにして小さな椅子に座っていました。ボブは、その子を愛していて、いつまでもそばに置いておきたいが、そのうち自分から離れていってしまうのではないかと心配している様子で、ティムの小さな痩せた手を握りしめていました。

スクルージは、自分の名前が呼ばれるのを聞いて、急いで顔を上げました。

「スクルージさん！」ボブがいました。「み

んな、スクルージさんのために乾杯しよう。今夜のごちそうはスクルージさんのおかげだからね」

「スクルージさんのおかげですって！」クラチット夫人が真っ赤になっていました。「もし彼がここにいたら、お返しにたっぷりと不平不満をごちそうしてあげたいわ。うんとお腹をすかせて来ることね」

「まあまあ」ボブがいました。「子供たちの前だよ！ それにクリスマスじゃないか」

「確かにクリスマスでもないかぎり考えつかないわ」彼女がいました。「スクルージさんみたいに、憎らしくて、けちで、冷酷で、思いやりのない人の健康のために乾杯するなんて。そうでしょう、ロバート！ かわいそうに、誰よりもあなたが一番よくご存じよ！」

「ねえ」ボブが穏やかに答えました。「クリスマスだから、さ」

「それじゃあ、私は、あなたのため、この日のために乾杯するわ」クラチット夫人はいました。「彼のためではなく。せいぜい長生きしてください！ それから、メリー・クリスマス、そして新年おめでとう！ さぞかし陽気でおめでたいことでしょう！」

子供たちも彼女に続いて乾杯しました。初めて気乗りがしない様子でした。最後にティム坊やが乾杯しましたが、やはり気が乗らない様子でした。なにしろスクルージはこの一家にとって、お話にでてくる人食い鬼なのです。彼の名前を聞いただけでみんなの心には暗い影がさし、それが消えるのにまる五分かかりました。

しかし、その影が消え去ると、彼らは前より十倍も陽気になりました。もうこれで不吉なスクルージの話はおしまいになったと安心できたからです。ボブ・クラチットは、実はピーター

のお兄ちゃんにぴったりの仕事があって、もしうまくいけば、週に五シリング六ペンスもの収入を得ることができるかもしれないよ、といました。二人のちっちゃなクラチットは、ビジネスマンになったピーターを想像して大笑いし、ピーターは、大きな襟の間から感慨深げに暖炉の火を見つめていました。まるで、そんなにびっくりするような額のお金が手に入ったら、まずどの方面に投資しようかと思案しているみたいでした。次に、婦人帽子店で見習をしているマーサが、自分がどんな仕事をしているか、どれだけ休みなく働き続けなければならないかについて、みんなに話して聞かせ、明日の朝は遅くまでベッドにいて、たっぷり眠るつもりよ、だって明日は一日お休みをいただいでるんですもの、そうそう、それから、何日か前に、伯爵夫人とそのご子息がお店にいらっしゃっただけけれど、そのお坊ちゃんがちょうどピーターと同じくらいの背格好だったのよ、といました。これを聞いたピーターは照れ隠しに、大きなシャツの襟を二つとも持ち上げましたので、もしあなたがその場にいたとしても、ピーターの顔を見ることはできなかつたでしょう。こうしたおしゃべりの間じゅう、栗の実と水差しに入った飲み物が何度もみんなに回されました。やがて、ティム坊やが、雪のなかで迷子になってしまった子供のうたを歌いました。悲しそうな小さな声で、とてもうまく歌いました。

とくにこれといって目立つようなものは何もありませんでした。裕福な家族ではありませんでしたし、着ている服もりっぱなものではありませんでした。靴には水が染み込むし、衣服だって不足していたのです。ピーターも、もしかすると、いや、非常に高い確率で、質屋の内側を知っていたかもしれません。しかし、彼らは幸

せでした。感謝し、お互いに愛し合い、今このときに満足していました。彼らの姿がだんだん消えていくときも、——精霊のたいまつたいまつの光のなかでもっと幸せそうに見えます——スクルージは、彼らの姿を見つめていました。とくにティム坊からは最後まで目を離しませんでした。

この場面が消え、突然元気な笑い声が聞こえてきたので、スクルージは驚きました。しかし、さらに驚いたことには、それはスクルージの甥の声であり、スクルージは、明るく、清潔で、きらきらと光る部屋のなかにいたのです。精霊は自分のそばに立ってにこやかに笑いながら、スクルージの甥の姿を見つめています。

病気や悲しみが人にうつってしまうように、笑いやユーモアにも抵抗できない伝染性があるということは、この世の公平で、偏りが無い、りっぱな取り決めといえるでしょう。スクルージの甥が心の底から楽しそうに笑うと、彼の妻であるスクルージの義理の姪も、つられて同じように笑い、その家に集まっていた友人たちも少しも遅れることなく、心の底から楽しそうに笑いました。

「おじはね、クリスマスがね、ばかばかしいっていったんだよ！」スクルージの甥が大声でいいました。「しかも本気でそう思っちゃってるんだからね！」

「とても残念なことよ、フレッド！」スクルージの姪が本気になっていいました。こういう女性たちに祝福あれ。彼女たちは物事を中途半端にしません。いつだって大真面目なのです。

スクルージの姪はとても美しい女性でした。とびきり美しい女性でした。えくぼがあって、目のパッチリとした、かわいらしい顔。赤くふっくらとした小さな唇。まるでキスをするためにつくられたかのようです。いや、まったくそう

に違いありません。あごのあたりにあるいくつかの小さなくぼみは、笑うとひとつひとつとけあいます。こんなに明るく輝く瞳は今までに見たことがありません。全体として、彼女はしゃくにさわるほど美しい女性でした。しゃくにさわるほど申し分のない女性でした！

「おじは滑稽な人だよ」スクルージの甥がいきました。「それが本当なんだ。そのわりには愛敬がないけどね。だけど、おじが犯した罪にはいつだって罰が伴っているんだから、ことさら僕が悪くする必要はないよ。だって、いつも機嫌が悪くて損しているのは誰だい。おじ自身じゃないか、いつでも。たとえば、どういうわけか僕たちのことが嫌いで、一緒に食事をするのがイヤだという。その結果はどうだい。たいしたごちそうを食べそこなったわけじゃない、なんてね」

「たいしたごちそうを食べそこなったわよ、絶対に」スクルージの姪が口をはさみました。みんなが同じことをいいました。今さっき食事をいただいたばかりですから、みなさん有能な判定者といえるでしょう。今はテーブルのうえにデザートを置き、暖炉のまわりに集まって、ランプの明かりのそばで話をしていたのです。

「そうか！ それを聞いて安心したよ」スクルージの甥がいきました。「若い妻たちの家事については絶対の信頼、とはいかないからね。トッパー君、きみはどう思った？」

トッパーはあきらかにスクルージの姪の姉妹のひとりに目をつけていました。というのも、彼の答えは、僕のように家庭から追放されたあわれな独身男が、家庭料理の味について意見を述べる資格なんてありません、だったからです。これを聞くとスクルージの姉が——いいえ、バラをつけたほうじゃなくて、レースの襟飾りを

つけたぼっちゃりとしたほうです——頬を赤らめました。

紅茶のあとは、音楽を楽しみました。彼らは音楽一家で、男声合唱でも、輪唱でも、自分が歌っているパートを見失うなんていうことは絶対にありませんでした。とりわけ、トッパーは、額に青筋を立てることも、顔が真赤になることもなく、最後までバスのパートを盛んに唸っていました。しかし、彼らは、その晩をすべて音楽に費やしたというわけではありません。しばらくすると、罰金遊びを始めました。ときどきは子供に戻って遊ぶのもいいものです。とくに、イエスさま自身が幼な子であったクリスマスほどそれにふさわしい日はありません。しかし、その前に目隠し遊びがありました。トッパーが本当に目隠しをしていると信じるくらいなら、彼の靴に目がついていると信じたほうがましです。彼がレースの襟飾りをつけたぼっちゃりとした姉のあとを追いかけるやり方というのは、人間の信じやすさに対する冒とく行為というものです。火かき棒を倒しても、椅子のうえに転んでも、ピアノにおもいきりぶつかっても、カーテンのなかで息ができなくなっても、彼女が行くところ、彼もまた行くのでした。彼はいつだってぼっちゃりとした姉の居場所をつきとめます。ほかの誰もつかまえようとはしませんでした。もしあなたが、何人かがそうしたように、彼にぶつかってそのまま立っていたとしても、彼はつかまえようというふりをするだけで、——あなたの理解力に対する侮辱としか思いません——すぐにぼっちゃりした姉のほうにそれていってしまうのです。

「新しい遊びが始まった」スクルージがいました。「もう三十分、精霊さん、あと三十分だけいさせてください！」

それは「イエスとノー」と呼ばれる遊びでした。スクルージの甥があるものの名前を考えて、みんながそれを当てるのです。彼はみんなの質問に対してイエスかノーで答えなければなりません。彼には質問の雨あられが降りそそぎましたが、彼から引き出した答えによれば、彼が頭のなかに思い浮かべているのは、動物であり、生きた動物であり、かなり愛敬の悪い動物であり、獐猛な動物であり、唸ったり、時には不平をいう動物であり、ときどきしゃべる動物であり、ロンドンにいて、通りを歩く動物であり、見世物にはなっていない、人に連れられてはいない、動物園にはいない、市場で売られてはいない動物であり、馬ではなく、ロバでもなく、雌牛でもなく、雄牛でもなく、虎でもなく、犬でもなく、豚でもなく、猫でもなく、熊でもありません。新しい質問が投げかけられるたびに、甥はお腹を抱えて大笑いしました。彼はあまりのおかしさにたまらなくなつて、とうとうソファから立ち上がると、足を踏み鳴らして笑い出しました。ついに、あのぼっちゃりとした姉が叫びました。

「わかったわ！ 答えがわかったわ、フレッド！
答えがわかったのよ！」

「何だい」フレッドが叫びました。

「あなたのおじさん！ スクルージおじさん！」
確かにそのとおりでした。みんながよくわかったものだといって感心しました。でも、なかには、「それは熊ですか」という質問には「イエス」と答えるべきだったと不平をいうものもいました。

スクルージおじさんは、みんなに気づかれることなく、陽気で、心も軽くなっていたので、時間さえゆるせば、聞こえない声で、気づかないみんなのために乾杯したことでしょう。しか

し、彼の甥が最後の言葉を口にした瞬間、その場面は消え、彼は再び精霊とともに旅にでていました。

たくさんものを見て、遠くまで行きました。多くの家々を訪問しましたが、いつでもハッピー・エンドでした。精霊が病気で苦しんでいる人たちのそばに行くと、彼らは少し元気になりました。異国で働いている人たちのそばに行くと、彼らは故郷を身近に感じました。苦しんでいる人たちのそばに行くと、彼らは我慢強くなり、希望が持てるようになりました。貧しい人たちのそばに行くと、彼らの心が豊かになりました。救貧院でも、病院でも、監獄でも、どんな不幸の行きつく先でも、虚栄心の強い、つかのまの管理者が固くドアを閉ざし、クリスマスを締め出してしまわない場所では、精霊は彼の祝福を与え、スクルージに教訓を学ばせました。すると、突然、彼らは開けた場所に立っていて、十二時の鐘の音が聞こえてきました。

スクルージは精霊を捜してあたりを見まわしましたが、彼の姿はもうどこにも見あたりませんでした。十二時の最後の鐘の音が鳴り終わったとき、彼はマーレイの予言を思い出して目を上げました。すると、向こうから、全身が黒い布で覆われた厳かな様子の精霊が、地面のうえにたちこめる霧のように、ゆっくりと、彼のほうに向かってやってくるのが見えました。

■第四節 最後のクリスマスの精霊

精霊は、ゆっくりと、重々しく、無言で近づいてきました。精霊がそばまで来たとき、スクルージは両膝をついて頭を垂れていました。その精霊は、陰鬱さと不可解な影をあたりにまき散らしながら、スクルージのところまでやって

きたからです。

精霊の全身は真黒な衣服で覆われており、その頭も、顔も、体も見ることができませんでした。ただ一つ見えていたのは、まっすぐに伸ばした片腕だけでした。精霊は話もしなければ、動きもしなかったので、スクルージは、これ以上精霊について知ることはできませんでした。

「わしがお目にかかっているのは、これから先のクリスマスの精霊さまですか。未来の精霊さまですね！ 今までお会いしたどの精霊さまよりも恐ろしく感じます。ですが、あなたさまの目的はわしのためになることだとわかっておりますし、今では新しい人間として生まれかわりたいと思っておりますので、感謝の心で、あなたさまのお供をいたします。口を利いてはいただけないのでしょうか」

精霊は返事をしませんでした。精霊の手はまっすぐに彼らの前方に向かって伸びていました。「導いてください！ 導いてください！ 夜はすぐに終わってしまいます。わしにとってこの時間は貴重なものだとわかっております。導いてください、精霊さま！」

彼らが街のなかに入っていたとはどうも思えませんでした。むしろ、街のほうが彼らのまわりに出現したと思えたほどです。どちらにしても、彼らは街の中心部にいました。ロンドンの王立取引所の、商人たちの間にいたのです。

精霊は、何人かの商売人たちがかたまって話をしているそばで立ち止まりました。スクルージは、精霊の手が彼らのほうを指差しているのを見ると、歩み寄り、彼らの話に耳を傾けました。

「いや」大きなあごをした、太った男がいました。「よくわからないんだ。わかっているのは、彼が死んだということだけだよ」

「いつ死んだんだい」もう一人の男が尋ねました。

「昨夜だと思うがね」

「いったい全体どうしたっていうだろうね。野郎は死なないと思ってたけどね」

「神のみぞ知るさ」最初の男が、あくびをしながらいいました。

「金はどうしたのかね」赤ら顔の紳士が尋ねました。

「会社の者に遺したんだろう、たぶん。俺にお金を遺してくれてはいない。それだけは確かだ。では、ごきげんよう」

スクルージは、最初、精霊がこんなに些細な、取るに足りない会話に重きを置くということに驚きましたが、何か別に隠れた意味があるに違いないと思い直して、それはいったい何なのか考えてみました。それは、彼の共同経営者だったマーレイの死と関係があるとは思えませんでした。なぜなら、それは過去の出来事であり、この精霊が見せているのは未来だからです。

スクルージは、あたりを見まわして、取引所のなかに自分自身の姿を見つけようとしていました。しかし、彼がいつも立っている場所には別の人物が立っており、彼がいつもこの場所に姿を現す時刻になっても、彼は入り口から流れ込んで来るたくさんの群集のなかに彼自身の姿を見つけることはできませんでした。しかし、彼はそのことであまり驚きませんでした。というのも、彼は心のなかで新しい生活に考えをめぐらせていて、これは新しく生まれた決心が遂行された結果なのだと考え、またそう望んでもいたからです。

彼らはこのにぎやかな場所を離れ、人通りの少ない地区にある怪しげな店へと向かいました。そこでは、鉄くず、古着、ぼろきれ、瓶、骨、

脂ぎった臓物などが、白髪頭のやくざな老人によって売買されていました。彼は座ってパイプを吹かしています。

スクルージと精霊がこの男の前にやってくると、すぐに重たい包みを背負った一人の女がそこそと店のなかに入ってきました。しかし、そのあとから、同じように荷物を背負った別の女が続いて入ってきました。しかも、そのあとからまたすぐに色あせた喪服を着た男が入ってきたのです。しばらく三人が顔を見合わせたあとで、彼らはいっせいに大声で笑い出しました。

「掃除婦が一番目だからね！」最初に入ってきた女がいました。「洗濯女は二番目、葬儀屋が三番目。いいかい、ジョー、これは偶然なんだよ！ 示し合わせたわけでもないのに、三人がここで顔を会わせたんだからね！」

「そうでもないやね。お前さんとは古くからの馴染みだし、ほかの二人も知らぬ顔じゃあるまい。今日とはどんな物を持ってきたんだい、ちよいと見せてみな」

「まあ、ちよつと、待ちなさいよ、すぐに見せるから。何をそんなにビクビクしてるの。かまやしないよ、デイルバーの奥さん」さっきの女がいました。「誰だって自分が一番大事なんだから。あの男もそうだったじゃないの！ こんなものを取られて誰が困るっていうの。死人が困るっていうかい」

何か申し訳なさそうな様子のデイルバー夫人がいました。「確かに、困らないわねえ」

「あのけちな因業じじいが、死んだあとでもブツを手放したくなかったら、どうして生前人並みに振舞わなかったんだい。そうしていりゃ、死神に襲われたときにも、一人ぼっちで息を引き取るんじゃないかって、誰か看取ってくれる人がいたはずだよ」

「いいことというじゃないの。天罰が下ったんだね」

「もうちょっと重たい天罰だったらよかったのにね。ほかにぶん取って来るものがありゃ、間違いない、そうやってましたよ。さあ、包みを開けて、値段を教えておくれ。単刀直入に頼むよ。あたしがいちばん最初で、二人に中身を見られてもへっちゃらだからね」

ジョーは、包みを開けるためにひざまずくと、なかから、大きくて重たくて黒っぽい物を取り出しました。

「何だこりゃ、ベッドのカーテンじゃないか！」
「そうだよ、ベッドのカーテンだよ。ほら、気をつけて、毛布のうえにランプの油が落ちちゃうよ」

「野郎の毛布かい？」

「ほかに誰かいるかい。毛布がないからって風邪ひきゃしないよ。そう、それ！ そのシャツは穴の開くほどよく見ておくれよ。といっても、シャツには穴一つ開いてないし、擦り切れたところもないからね。それは野郎が持ってた一番上等なやつで、とってもいいものなんだからね。あたしがいなけりゃ、もったいない、死体に着せて埋葬してたところだったよ」

スクルージは恐怖におののきながらこの会話を聞いていました。

「精霊さま、わかりました。よくわかりました。この不幸な男がたどった道をわしもたどるところだったとおっしゃりたいのですね。わしの人生がそちらのほうに向かっていた、といたいのでしょうか。あれ、いったいどうしたんだ！」

突然場面が変わり、スクルージは、剥きだしになった、カーテンのないベッドのそばに立っていました。窓の外からは、青白い月の光が、まっすぐにこのベッドのうえを照らしていまし

た。そして、そのベッドのうえには、誰からも看取られず、悲しまれず、弔われない、身ぐるみはがれた見知らぬ男が横たわっていたのです。

「精霊さま、どうか死と愛情が結びついた関係もわしに見せてください。そうでないと、精霊さま、あの陰気な部屋が一生わしの脳裏から離れません」

精霊は彼をボブ・クラチットの家に案内しました。彼が一度訪れたことがある、あの同じ家です。母親と子供たちが暖炉のまわりに座っているのが見えました。

静かでした。とても静かでした。あの騒々しいちっちゃなクラチットたちは、置物みたいにじっとして動かず、おとなしく座ってピーターの顔を見上げています。ピーターは聖書を前にして座っていました。母と娘たちは針仕事をしています。しかし、彼らは確かに、とても、とても静かでした！

「『イエスは一人の子供を呼びよせ、彼らの真ん中に立たせていわれた』」

スクルージはどこでこの言葉を聞いたのでしょうか。夢の中ではありません。彼と精霊が玄関の敷居をまたいだとき、ピーターがそれを声に出して読み上げたのです。少年はなぜ途中でやめてしまったのでしょうか。

母親は、縫い物をテーブルのうえに置くと、目頭を押さえました。

「目が疲れちゃったわ」彼女がいました。

あれは涙でしょうか。ああ、かわいそうなティム坊や！

「さあ、これでよくなった。ロウソクの明かりで縫い物をすると目が疲れるわね。でも、お父さんが帰ってきたときに、絶対に疲れた目を見せちゃいけない。そろそろお父さんが帰ってくる頃ね」

「いつもより遅いよ」ピーターが本を閉じながらいいました。「ここ何日か歩くスピードが遅くなってるんじゃないかな、お母さん」

「はやがけをした時のお父さん——ティム坊やを肩に乗せて、はやがけをした時のお父さん覚えてるわ」

「僕も覚えてるよ」ピーターが叫びました。「よくやってたよね」

「私も覚えてるわ」もう一人がいいました。みんなが覚えています。

「だけどティムはとっても軽くてねえ、お父さんはティムのことが大好きだったし、少しも大変じゃなかったのよ。あっ、お父さんが帰ってきたわ！」

彼女は急いで彼を玄関に出迎えました。マフラーをした小さなボブが入ってきました。お茶は暖炉の棚のうえに用意されていて、家族みんなが先を争って彼にお茶を勧めました。それから、二人のちっちゃなクラチットが彼の両膝のうえに座ると、それぞれがお父さんの別々の頬に自分の頬を寄せました。まるで、「くよくよしちゃだめだよ、お父さん。悲しんでばかりいちゃだめだよ！」と叫んでいるみたいでした。

ボブは家族に囲まれて元気になり、みんなに嬉しそうに話しかけました。彼はテーブルのうえに置かれた針仕事を見て、クラチット夫人と娘たちの勤勉ぶりと仕事の速さをほめました。そして、日曜日までには終わりそうだね、といいました。

「日曜日ですって！ それなら、今日教会に行ってきたのね、ロバート」

「そうなんだ」ボブが答えました。「きみも行けたらよかったんだけどね。緑がとてもきれいで君も安心したと思うよ。でも、まあ、いつでも行けるからね。日曜日には必ず来るからって

約束したんだ。僕のちっちゃな、かわいい子！僕の大切な子供！」

ボブは突然泣き崩れました。どうしようもなかったのです。どうにかしようがあれば、ボブと子供との距離はおそらく今よりも遠いものだったはずですよ。

「精霊さま」スクルージがいいました。「お別れの時間が近づいているような気がします。ですが、どうやって結末をつけられるのかわかりません。あの死んで横たわっていた、顔の見えない男が誰なのか教えてください」

未来のクリスマスの精霊は、彼を、陰気で、人気のない、荒廃した墓地へと連れて来ました。

そこで、精霊は墓の間に立ち、ひとつの墓石を指差しました。

「あなたさまが指差すその墓石に近づく前に、一つだけ答えてください。これまでに見てきた幻影は、絶対にそうなるという未来の姿なのでしょう、それとも、そうなるかもしれないという、たんなる警告にすぎないのでしょうか」

精霊は、じっとして動かず、ひとつの墓石のそばに立って、その墓石を指差しています。

「人の行く末は現在のなかに読み取れるもので、生き方を変えなければ、その通りに進んでいくものでしょう。しかし、生き方を変えれば、その行く末も変わるのではないのでしょうか。あなたさまがわしにお見せになった幻もそうだとおっしゃってください！」

精霊は不動のまま墓石を指差しています。スクルージは、わなわたと震えながら、はうようにしてその石に近づきました。そして、その誰からも見捨てられた石のうえを指でたどると、その石に刻まれていたのは、『エ・ベ・ニー・ザ・ス・ク・ルー・ジ』——彼自身の名前でした。



「あのベッドで横たわっていたのはわしだったのですか。まってください、精霊さま！ 困ります！ 精霊さま！ わしのいうことを聞いてください！ わしは生まれかわりました。わしはもう以前のわしとは違うんです。精霊さまのおかげなんです。もし、希望がまったくないなら、どうしてわしにこんな光景をお見せになったのですか。生まれかわることによって、あなたさまがお見せになった幻を変えることができると、どうかおっしゃってください」

初めて、精霊の親切な手が震えました。

「心のなかでクリスマスを大切にします。一年じゅうその気持ちを持ち続けます。わしは過去と、現在と、未来のなかに生きています。三人のクリスマスの精霊さまはわしのなかで生き続けます。その教えは決して忘れません。ですから、精霊さま、この石のうえに刻まれた文字を消すことができるとおっしゃってください！」

彼は、両手を上げて、どうか自分の運命を変えてくださいと、最後の祈りを捧げました。す

ると、彼は精霊に何か異変が起こったことに気づきました。精霊の姿は、見る見るうちに、縮まり、崩れ落ち、小さくなって、ベッドの柱になったのです。

そうです！ 自分のベッドの柱です。ベッドも自分のベッドなら、部屋も自分の部屋でした。そして、もっともよくて、もっとも幸せなことには、彼の前には時間が——自分自身の人生の時間があって、今までの償いができるのです！

喜びでわれを忘れていた彼は、今までに聞いたこともないような楽しげな教会の鐘の音を聞いてわれに返りました。走って窓のところに行くと、窓を開け、頭を突き出しました。霧もでていません。もやもかかっていません。夜でもありません。澄んだ、明るい、爽やかな、すばらしい朝でした。

「今日は何日だい」スクルージは、日曜日の礼服を着た少年に向かって叫びました。おそらく彼は道草を食ってこの敷地に迷い込んだのでしょう。

「なに？」

「今日は何日だい、親友」

「今日だって？ クリスマスにきまつてるじゃん」

「クリスマスか！ ありがたい。一日のことだったんだ。おーい、親友！」

「なーに！」

「隣の隣の通りにある鳥肉屋を知ってるかい。角のところにある」

「うん。知ってるよ」

「賢い子だなあ！ すばらしい子だ！ 確か一等賞を取った七面鳥が飾ってあって、売りに出されてたと思うんだけど、知ってるかい。小さいやつじゃなくて、大きいやつ」

「ああ、僕ぐらい大きいやつ」

「愉快な子だなあ！ 話をするのがとても楽しい。そうだよ、友達」

「さっきもぶら下がってたよ」

「そう？ じゃあ、買ってきてくれないかな」

「ええ！」少年はびっくりしていました。

「いや、ほんと、大真面目なんだよ。行ってね、ここまで持ってくるようにいってくれないかな。そしたら、配達先を教えるから。お店の人を連れてきてくれたら、お礼に一シリングあげるよ。五分以内に戻ってきたら、ご褒美に半クラウンあげよう」

少年は弾丸みたいに走っていきました。

「ボブ・クラチットの一家に贈ってやろう！ 贈り主は内緒にして。ティム坊やくらいある七面鳥。どんなに面白いコメディアンだって、こんなに楽しいジョークは思いつかないだろう！」

紙のうえにボブ・クラチットの住所を書く手は興奮してふるえていましたが、なんとか書き上げました。そして、鳥肉屋の店の者を出迎えるために、階段を下り、一階の玄関の扉を開けました。

それは見事な七面鳥でした！ この鳥が、自分の足だけで、こんなに大きな体を支えていたとは思えません。両足がロウソクみたいにポキッと折れてしまったとしても、不思議ではなかったでしょう。

彼は一番の晴れ着に着がえ、ついに街へと出かけました。現在のクリスマスの精霊と一緒に見たように、この時刻になると人々が街に繰り出していました。後ろ手に歩きながら、スクルージは、うれしそうな顔をして、道ゆく人々の顔を眺めました。彼の笑顔がたまらなく魅力的だったので、三、四人の気さくな人たちが、つられて、「おはようございます！ クリスマスおめでとう！」と挨拶しました。のちにスクルージ

がよく人に語ったように、彼は今までこんなに心の浮き立つ音色を聴いたことがなかったので

す。
午後になると、彼は甥の家に足を向けました。勇気を出して玄関のドアをノックするまでに、彼は十数回もドアの前を行ったり来たりしました。しかし、ついに意を決すると、それをやり遂げました。

「ご主人はご在宅かな、お嬢さん」スクルージは若い女中にいました。感じのいい女性だ！
とつても。

「はい、いらっしゃいます」

「どちらにおられるのかな、お嬢さん」

「食堂にいらっしゃいます。奥様とご一緒です」
「わしらは親戚なのでね」もうすでに食堂のドアの取っ手に手をかけながら、スクルージがいました。「入らせてもらいますよ、お嬢さん。フレッド！」

「ああ、ビックリした！」フレッドが叫びました。「どなたです」

「わしだよ。お前のおじのスクルージだ。食事をしにきたんだ。入ってもいいかな、フレッド」

どうぞ、どうぞ入ってください！ 甥があんまり強く何度も握手を求めるので、スクルージの腕が抜けてしまわないのが不思議なくらいでした。五分もすれば、スクルージはくつろぐことができました。これほど心のこもったもてなしはそうあるものではありません。スクルージの姪もあの時とまったく同じでした。トッパーがやってくると、彼もまったく同じでした。ぽっさりとした姉がやってくると、彼女もまったく同じでした。みんながあの時とまったく同じだったのです。すばらしいパーティー、すばらしい遊び、すばらしい友愛、ス・バ・ラ・シ・イ、幸せ！

しかし、スクルージは翌朝早く事務所に出かけました。早くからそこにいて待っていました。ボブ・クラチットよりも先にいて、彼が遅れてくるところをつかまえたかったのです！ そうしようと心に決めていました。

そしてその通りになりました！ 時計が九時を告げても、ボブは来ません。十五分すぎても、ボブは来ません。ボブは、いつもの決められた時間よりも、十八分三十秒も遅れてやってきました。

ボブは、事務所に入ってくる前から、帽子を脱ぎ、マフラーも取り、すぐさま椅子に座ると、九時に追いつこうとでもするように、必死にペンを動かしました。

「おやおや！」スクルージは、できるだけいつもの声に似せて、うなるようにいいました。「こんなに遅れてくるなんていったいどういうことなんだ」

「たいへん申し訳ありません。遅れました」

「そうか。非を認めるんだな。じゃあ、こっちに来なさい」

「一年に一度のことです。もう二度とありませんので。昨日はちょっとはめをはずしてしまいました」

「いいか、わしが今からいうことをよく聞くんのだ。わしは、もうこういったことには我慢がならない。であるからして——」スクルージはそういうと、椅子から跳び上がり、ボブの胸を指でぐいとつきました。おかげでボブは、後ろによろめいて、水槽のような小部屋に舞い戻りました。「であるからして、お前さんの給料を上げることにする！」

ボブは恐ろしくなって震えました。相手が跳びかかってきたときの用心に、ちょっと物差しのように近寄りました。

「クリスマスおめでとう、ボブ！」スクルージは、ボブの背中をたたきながら、真面目な口調でこういいましたので、もはや誤解の余地はありませんでした。「クリスマスおめでとう、ボブ、今までの分をまとめていわせてもらうよ！

きみの給料を上げよう。そして、生活苦と闘っているきみの家族を援助させてほしい。さっそく今日の午後、クリスマスのポンチ酒でも飲みながら、そういった事柄について協議しようじゃないか、ボブ！ 暖炉に石炭をくべよう。そして、仕事にとりかかる前に、石炭を買ってくるんだ、ボブ・クラチット！」

スクルージは約束をぜんぶ守りました。いったことをすべて実行したばかりでなく、それ以上のことをしました。命が助かったティム坊やに対しては、彼は第二の父親になりました。彼は、この善きロンドンが、いいえ、この善き世界のすべての都市や町や区が知っているような、善き友人、善き主人、善き人となりました。なかには、彼がすっかり変わってしまったのを見て、笑う人もいましたが、彼自身の心がすでに笑っていたのですから、彼にとってはそれでよかったのです。

それからのち、スクルージが精霊たちのお世話になることはありませんでした。彼はいつも人からこういわれていました。もしこの世の中にクリスマスの本当の祝い方を知っている者がいるとすれば、それはスクルージさんである、と。私たちも、私たちみんなが人からそういわれるようになりましょう！ そして、あのクリスマスの晩、ティム坊やがいったように、僕たち一人ひとりに神さまの祝福がありますように！



(完)

(訳者後記)

本稿は、公開朗読版「クリスマス・キャロル」の全訳である。公開朗読版とは、1843年に出版されたオリジナル版の『クリスマス・キャロル』を、作者であるディケンズ（1812-70）自身が、自らの公開朗読（舞台での朗読）のために縮約したものである。オリジナル版と比べると、四割程度の長さである。翻訳の底本には、“A Christmas Carol In Four Staves”, *CHARLES DICKENS: SIKES AND NANCY and Other Public Readings*, edited by Philip Collins, The World's Classics, 1983を使用した。挿絵は、最初のディケンズの肖像（1870年3月19日付『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』紙より転載）をのぞき、オリジナル版のために、ディケンズの監修のもと、画家のジョン・リーチ（1817-64）が描いたものである。